

多声を奏でるアカペラ奏者たちの心理的体験についての考察

ー バンドメンバーとの関係性に着目して ー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
山田 翔大

本研究では、アカペラ奏者が、アカペラ活動を通してどのような心理的体験をしているのかを明らかにすることを目的とした。対象者は、現在アカペラ活動を行っている人、またはアカペラ活動の経験がある人の5名(男性1名、女性4名)であった。アカペラ奏者でもある筆者と研究協力者であるアカペラ奏者との一対一の語り合い法によるインタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析を行った。

分析の結果、アカペラ奏者の心理的体験として20個の概念と6個のカテゴリーが生成された。分析結果を経て、1)多声的音楽を他者とともに作り出すという体験を通して、心理的な防護壁を取り払い、互いの関係を発展させていくということ、2)自分もまた多声的音楽を作り出している一員であるということを感じることで、自分が唯一無二の存在であり、メンバーから必要とされる存在であるなど、肯定的な自己を体感すること、3)アカペラの音楽のあり方や形態を集団音楽療法に活用させることで、集団音楽療法の可能性をさらに広げる可能性があること、の3点において成果が得られた。

本研究では、研究協力者の年齢層や音楽の形態に限定性はあったが、音楽の理解をさらに深めるための一助になったと考える。